

2024年5月19日 聖霊降臨節（ペンテコステ）礼拝 聖霊降臨節 第1主日

説教題：「あるサマリア人(びと)の行動」

聖書箇所：使徒言行録2章1-8節（214頁）、ルカによる福音書10章25-37節（126頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93-1-52 交読詩編：82編1-8節（91頁）

讚美歌：83/348（神の息よ）/343（聖霊よ、降りて）/405（すべての人に）/27

「今週の聖句」〔「だれが…隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」〕（ルカ伝10：36-37）

「牧師室の窓」 「聖霊の降臨の場に 我あれば 如何なる言語 語りおりしか」

「倒れたる 人を助けし サマリア人(びと) 我も近づき 介抱せしや」

(1)皆様おはようございます。本日は聖霊降臨日礼拝です。「聖霊降臨日」とも「ペンテコステ」とも言います。ペンテコステとはギリシヤ語で50番目の、50日目の、と言う意味です。少し説明をします。ユダヤ教の3大祭りの中で最も重要視されていたのが「過越しの祭」です。エジプトで奴隷状態になっていた人々が神によってエジプトから救い出されたことを祝う祭りであり、遊牧民たちが春の到来を祝う祭りであると考えられています。ユダヤ教では1日の始まりは夕方の日没から始まります。その過越しの祭が始まる日没の数時間前にイエス・キリストは十字架の磔の刑で息を引き取り横穴式の墓に葬られました。その日は私たちの日付・曜日で言えば金曜日でした。キリストは翌々日の日曜日に復活をされ弟子たちの前に表れました。「過越しの祭」はキリスト教では「復活祭・イースター」と呼ばれています。

…話を元に戻して、「過越しの祭」の50日目の祭をユダヤ教では3大祭りの1つである「五旬祭（または、七週祭）」と呼ばれています。五旬とは10日間×5回、七週とは1週間（7日）

×7回繰り返して、49日となり、その翌日が50日です。ユダヤ教では7と言う数字は聖なる数、神に属する数、完全を示す数なのです。五旬祭とは、羊を飼う遊牧民が定住して畑を耕す農耕生活者となり、麦の収穫を祝う収穫感謝祭でありました。加えて、旧約聖書でモーセが神から律法を与えられたことを記念する日と言う意味があります。キリスト教では初代教会が信者を増やし共同生活を行なっていく中で、「教会の誕生日」と考えられるようになりました。序で乍ら、ユダヤ教の3大祭りの3つ目は「仮庵祭（かりいおさい）」と言いまして、ユダヤの民が出エジプトの荒れ野で天幕（即ち、仮庵）に住んだことを記念しての祭です。実際は秋の果物・果実の収穫祭です。

…余談ですが、この「聖霊降臨日」（麦の収穫）の時期に、パレスチナでもウクライナでも戦争により麦の収穫が出来ない、或いは、制限させられています。ウクライナは世界的な小麦の生産地です。天の恵み、大地の恩恵を受け取るべき農耕作業を行なわないことは人間にとって自殺行為と言えます。

この日本では食べ物がないことの恐怖は殆ど忘れられているようです。食べ物がないことの恐怖を、そして、平和を築くことの大切さをキリストの教会は警鐘を鳴らすべきです。現在のキリスト教は口では平和を言っていますが、今では「見ざる、聞かざる、言わざる」で今日の聖書に出てくるパリサイ人や律法学者になっていることを聖書と言う鏡に照らして見るべきだと思います。

(2)前置きが長くなりました。本日の聖書箇所の始めは使徒言行録2章1節～8節です。イエス・キリストは復活の後、40日間弟子たちと共に生活をして神の国について話され、そして、天に昇られました。今日の聖霊降臨の聖書箇所は使徒言行録の第2章ですが、第1章にも聖霊降臨のことが書かれています。第1章第5節、8節には次の様に書かれています。〔(1:5) ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。/(1:8)あなたがたの上

に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。} ここから読み取ることが出来ることはイエス・キリストがお話しされている「聖霊」とは、私たちを導く霊の力であると理解できます。

その聖霊が、五旬祭の日に弟子たち皆が集まっていた所に降ったのです。使徒言行録2章2節～4節を見てみましょう。「激しい風」や「家中に響く」「激しい風が吹い」き、普段の状況とは異なる異常事態が発生したのです。「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった」と書かれています。弟子たちの目の前で異常な事態が発生したのです。そんなことはあり得ない、嘘であると断定することも可能です。併し、皆さんはこれまでの人生の中で神の力を感じたことはありませんでしょうか。その時はその様に感じなくても後になって神の力が働いたのだと理解したことはありませんでしょうか。私は数多く体験してきました。事故が起きる寸前に助けられたことや良いことが起きる様に助けられたことを思い起こすと、今でも冷や汗が流れ、心の底から感謝しています。「炎のような舌が分かれ分かれに現れ」と言うのは、多くの人により多くの恵みが注がれることを意味していると思います。4節には〔(2:4)すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。〕と書かれています。言葉は異なっても、福音を共有する人々と友人になることが出来るのです。現に、この南板橋教会でも、先週から、〇〇国籍の〇〇さんが礼拝に出席されています。これは聖霊の導きだと思います。

(3) 今日のもう一つの聖書箇所はルカによる福音書10章25節～37節です。良きサマリア人の話として15章にある放蕩息子の話と共によく知られています。マタイ・マルコ・ルカの共観福音書の中で、ルカ福音書のみに出ています。教会学校ではお馴染みのお話しです。先月4月の当教会での教会学校の絵本読み聞かせに出てきました。聖書と言うのは、1回聞けばそれで十分ではありません。繰り返し、繰り返し聞いて、読んで、天の国に行く時にも繰り返すのです。

きょうの聖書箇所は、律法の専門家がイエス様に論争を持ちかけて恥をかかせようとしています。彼は律法の専門家ですから、律法、即ち、聖書（私たちが旧約聖書と呼んでいる聖書）のことを良く知っているのです。この人はイエス様に言葉で切り込んできました。〔(10:25)…先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。〕旧約聖書には「永遠」という言葉がたくさん出ています。創世記には「永遠に生きる」や「永遠の契約」という言葉で記されています。彼からの質問に対して、イエス様はすかさず、〔(10:26)…律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか〕と切り返します。つまり、この場面では律法学者からの質問に「何々は何々です」と答えることが求められているわけではありません。律法学者が尋ねている本質に対してイエス様は返答しているのです。律法学者ならば当然に知っている内容だからです。律法学者は旧約聖書の申命記6章5節とレビ記19章18節に書かれている言葉を即座に答えました。

〔(10:27)彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。〕この学者は聖書に書かれている神の御言葉をしっかりと理解していたのです。併し、学力が高いと言うのと、高い判断力があると言うのは、同じではありません。学校での成績が良いことが人間としてしっかりとしているかは全くの別物です。戦前・戦中の日本の軍隊では陸軍士官学校や海軍兵学校の卒業時の成績で軍人としての能力を判断しました。その結果が戦争へと突入してしまいました。現代社会でも似ている所があります。キリスト教の神学校も似てはいないでしょうか。もっと、もっと、多様な考え方を尊重する社会を作らなければこの国は衰退してしまいます。多様

性、ダイバーシティーとは何かを、今日の聖書箇所から学んで行く、絶好の場面であると思います。

(4)続けます。28節29節です。〔(10:28)イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」/(10:29)しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。〕律法の専門家は問題の確信である「神を愛す、隣人を愛す」ことが最も重要であると回答したのです。併し、律法の専門家はここでの的はずれな質問をしてしまいました。いま、私は「的はずれ」と言いました。「罪」とはギリシア語でハマルティアと言いまして「的はずれ」と言う意味です。律法の専門家はイエス様からの質問に対して、よく考えれば、答えることが出来たのでありましようが、この世で暮らす多くの人々、即ち、隣人の存在を見失ってしまったのです。いいえ、この専門家は「わたしの隣人とはだれ」であるのかを知っていたのではないのでしょうか。「隣人」とは、人々であり、特に虐げられていた人々であることを、その人たちのために自分自身が働いていないこの事実を知っていたのではないのでしょうか。彼は、心の中では葛藤していた、心の中では苦しんでいたとも考えられます。

(5)扱て、30節から35節までにサマリア人（じん）が息絶え絶えの人を（恐らくは）ユダヤ人が助けるのです。サマリア人（じん）とユダヤ人とは犬猿の仲ですが、助けるのです。一方、ユダヤ人の中では社会的な地位があり、裕福でもあった祭司もレビ人も見て見ぬふりをして通り過ぎてしまいました。旧約聖書の核心である、中心である「神を愛し、隣人を愛する」ことをイエス様は譬え話で話されたのです。36節37節〔(10:36)さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。〕/(10:37)律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」〕…このよきサマリア人（びと）の話は教会学校での定番と申し上げましたが、この人の世で生きる人たち、私たちに不可欠の栄養素、栄養源であります。キリスト教は宗教の1つとして、世間の人々に伝えるべきだと思います。多様性、ダイバーシティー推進の為に人々に伝えねばならないと思います。私たちはイエス様がお話し下さった「よきサマリア人（びと）」として、人生の日々を歩んで参りたいと思います。

・・・お祈りいたします。